

はじめての歎異抄講座

1.慈悲の実践～ ヒューマニズムの限界と、浄土の慈悲

親鸞聖人は越後から関東へ移る道中、利根川上流の佐貫^{さぬき}で土地の人から協力を求められ、天候不順の回復を願って始めた浄土三部経の1,000回読誦を途中で断念したが、これは念仏者であっても「慈悲の実践を貫徹する」ことは不可能ということを表している。また、戦乱や飢饉、疫病など非情で不条理な時代にあって、浄土の慈悲の世界がなければ、現実に光の見えない生活を強いられている人は親鸞聖人だけではなく、ヒューマニズムの限界に対する答えは既成の経典を、普通に読むだけでは見えてこない。

→地平線の向こうは、何もないのか、果たして光があるのか？

→絶望の中で、希望が果たして感じられるのか？

2.法然聖人の絶望と希望

①15歳で比叡山にのぼり、仏教を学び始める。

②修行のなかで、仏の教えはいずれも戒・定・慧の「三学」^{かい じょう え さんがく}を守れということであることを知った。顧みると、自分を含めほとんどすべての者は三学を守る器ではない。この人たちが救われる教えがなければ、万人が救われることにはならない。それを求めて18歳のとき、黒谷^{くろだに}に遁世した。絶望

③24歳のときには南都に足を延ばして教えを求めたものの、応じてくれる教えを見出すことはできなかった。

④再び黒谷に籠り、改めて浄土の教え、なかでも『往生要集』(源信僧都)の念仏に傾注し、33歳で念仏による他力往生の直道を得るという体験的結論に達した。希望

⑤そのような己証を得ても、それを証明する教学的根拠が明らかにならなければ、他から認められない。法然は以後、念仏によって救われる教学的根拠、すなわち浄土教が独立の法門であること根拠をもとめて苦闘する。

⑥あらゆる祖師の教えを幾度も読み返し、善導大師の書物を2度読んだときには見つけられなかったが、3度目にして下記の文から教学的根拠を得た。43歳のときとされる。

三学とは…仏教とは「戒律」を守り、貪欲^{どんよく}(我欲)、瞋恚^{しんに}(いかり)、愚痴^{ぐち}(真実を知らない愚かさ)、驕慢^{きょうまん}

(たかあがり)、疑心(ぎしん)(仏教の真理性を疑う)、悪見(あっけん)(誤った見解、思想)を改め、何ものにもとらわれない無執着(むしゅうちやく)の清らかな生活をする。さらに心を静める「禅定」(精神統一)を習得し、真実をさとり「智慧」(かいほつ)を開発する、これらを称して戒、定、慧の三学が仏道とされる。

3. 「仏の願に順ずる」という答え

「一心専念 弥陀名号 行住坐臥 不問時節久近 念念不捨者 是名正定之業 順彼仏願故」
 (『選 択 本願念仏集』法然聖人)

(一心に専ら弥陀の名号を念じて、行住坐臥に、時節の久近を問はず、念々に捨てざるもの、これを正定(しょうじょうごう)の業と名づく。かの仏の願に順ずるが故に)

(一心に専ら阿弥陀仏のみ名を念じ、いつでもどこでも片時も止めないこと、それを救われるための正しい行いという。なぜならば、それは阿弥陀仏の本願に添うものだからである)

「弥陀の名号を念じ」とは口に南無阿弥陀仏を称える称名念仏をいい、念仏といえは観想念仏を指した当時は画期的な主張。さらに、称名念仏こそ「阿弥陀仏の本願に随順した行だ」という。これは念仏が五正行のなかでも「程度が低く」、助業(じょごう)と長く考えられてきたなかであって、称名念仏こそ正定業(しょうじょうごう)であり他四つは助業であるという主張することであり、驚嘆すべき内容だった。

→これが、ヒューマニズムの限界を超えていく唯一の答え、浄土の慈悲に「つながる」称名念仏の根拠となった。善導大師「観経疏」(散善義)からの引文。

五正行とは…①浄土経典をよむこと(読誦)、②阿弥陀仏を思い浮べること(観察)、③阿弥陀仏を拜むこと(礼拝)、④阿弥陀仏の名を称えること(称名)、⑤阿弥陀仏を讃え供養すること(讃歎供養)

4. なにを拠り所とするのか

「私が死んでも、この世で、自らを島とし、自らを頼りとして、他人を頼りとせず、法を島とし、法を拠り所として、他のものを拠り所とせずにあれ」(『ブツ最後の旅』中村元)

乱世の不透明な時代にあって、「最終的に何を拠り所とするのか」という探求を丹念に続け、ヒューマニズムの限界へ挑んだプロセスが、結果として阿弥陀如来への帰依と、それにつながる信心を尊ぶ念仏の教えを生んだ。大切なのは結果を見ることなく、プロセスを自らも辿ること。